

# 美術手帖

6  
2006  
Vol.58  
No.882  
BT



コラージュ  
横尾忠則

特集 工芸発見!

日本美術って  
すごい!

辻惟雄 「美術と工芸の境界を越えた、新しい世代のアーティストの出現を」





左— Shugakuin (red) 2006 紙にインク、グアッシュ 56×76cm  
 右上— Ichijoji (左からorange and blue, brown and pink, semi) 2005  
 紙にインク、グアッシュ 各19×19cm  
 右下— 会場風景

## アン・タランティーノ 「Near-maps」展

gallery neutron  
4月10日—23日

京都

ストーリーでインクを吹き付けながら描いているというモチーフの色のにじみや、ところどころ留まりながら微細に延びた線から、はじめは植物や虫などの生きものを想像したが、“Shugakuin” “Ichijoji” という実在の地名をタイトルにしたドローイングは、作家が自宅近辺を歩いた道のりやそこで感知したさまざまな物事を記号的に示す地図であり、記録でもあった。

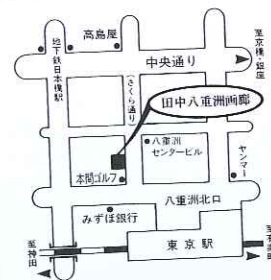
意味、記号、機能の脈絡が明らかになる以前の“もの”の存在は、形態そのものへと意識を向かわせる。2

年前、日本語を読むことも話すこともできないまま京都に移り住んだアン・タランティーノは、目にした漢字を意味のある言語という情報でなく、図形や装飾などの単純な視覚的記号としてとらえている。手にした地図の多くは縮尺が不正確であり、イラストで示される観光名所の表記は感覚的に馴染みのないものであったという。自宅の近隣を散歩し目にした物事を象徴化した作品は、未知の土地で感じたそのような情報の不正確さという経験をもとにしている。

それらは具体的な場所を示す地図といえるが、しかし画面に表されるモチーフや色彩は、目に見える存在物だけを指しているのではない。例えば着物の模様や菓子の形など、風土と歴史に培われた文化や自然といった、視覚のみならず聴覚や嗅覚な

ども含めて作家が感受したこの地域のさまざまなイメージが織り込まれているのである。記号的に表現されるそれらの形態は、受け手が想像の自由の限りに意味をつなぎ変えていくことができるシンボルともいえるだろう。

慎重に吹き付けたのであろうインクの線の流れが静かな緊張感を思わせて、慣れない地を歩いた時間へと想像がめぐる。京都を知る人間にとっては、自らの体験の記憶を差し挟んで既知の風物に出会う期待やそこに移り変わる季節を連想する喜びをも味わわせてくれる。色や形に時間を織り込んだこの地図は、京都を舞台にした小説のような物語を感じさせ、見る地図というより読む地図となってその世界へ誘っていくようであった。



ビル1階の  
**貸画廊**  
予約受付中

壁面長さ 59m  
壁面高さ 2.8m  
床面積 119㎡  
床耐荷重 300kg/㎡まで

## 田中八重洲画廊

〒103-0028  
東京都中央区八重洲1-5-15 田中八重洲ビル1F  
TEL. 3273-6208 電話くたされば案内書送呈